

(4) 教育効果の測定方法を開発する仕組みの導入状況

現状の説明

現状では、教育効果は個々の教員の担当科目だけによる印象批評として教員個別の経験としてだけ蓄積されており、科目間の相関や個々の学生について年次ごとの追跡調査など、組織的に教育効果を測定しようとする機運は希薄である。

点検・評価

教育効果を科目ごとに設定する到達目標への到達度によって測定するのであれば、何らかの試験を実施することで測定が可能となる。しかしながら、本学が立脚する教育的立場である現代実学主義の観点からは、教育効果の測定として個別科目ごとに行われるものではなく、問題発見・解決能力という総合力の文脈で測定されるべきものであると認識している。したがって、教育効果の測定方法の開発のための仕組みを今後の課題として、早急に議論を進めるべきであると考えている。

(5) 教育効果の測定結果を基礎に、教育改善を行う仕組みの導入状況

現状の説明

教育効果を測定する組織的取り組みには至っていない。

点検・評価

教育改革のための主な要点は、大学教職員の問題意識の共有であると認識しているが、現状では大学全体として教育改善を行うための組織的仕組みの導入段階には達していない（ただし、学生授業評価アンケートを平成15年度実施）。

将来の改善・改革に向けた方策

教育改善のための様々なアプローチ、たとえば学生授業評価アンケートや教員相互の授業参観などを通じて、教員の教育スキルを向上させるための具体的提案を議論している。

2 厳格な成績評価の仕組み

(1) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

現状の説明

本学では、現在、学生による科目選択の自由を確保する観点から、履修科目の登録制限は行っていない。これまでは、別に提示している「履修モデル」などを参考に、学生は将来の進路にあった科目選択を行えるよう履修機会を確保して来た。そのために、時間割編成の際には、履修者数の分散を図るために、同一科目に複数クラスを別曜日・時限に設定したり、同種の科目分類の科目に対しては、あえて重複配当するなどして来た。学生に履修の機会を与え、選択の自由を確保するという点においては、一定の成果をあげてきたが、一方では、教員の過度の負担増や、夕刻遅くまでの時間割配当をせざるをえないなどの弊害も徐々に現れ始めている。

将来の改善・改革に向けた方策

平成13年度に改組した本学学部は平成16年度に完成年度を迎える。それを受け平成17年度からは、全学をあげて教育課程の改正を予定している。これを機に、学生の選択の自由をある程度確保しつつも、効果的な時間割の運用等が可能になるよう、CAP制を導入して一定の条件もとで履修制限を行うことを検討しようとしている。平成17年度の教育課程の改正について現在検討が行われている「将来構想委員会カリキュラム検討部会」並びに教務システムの検証・運用を担当する「教務委員会」において、鋭意検討するよう、現在準備中である。

(2) 成績評価法、成績評価基準の適切性

現状の説明

成績評価の方法や評価基準について教員間での合意・確認事項となっておらず、科目を担当する教員ごとに異なっているのが現状である。

点検・評価

より有効な教育のためにクラス分けをしている科目についても、クラス全体で評価基準を定めたり、クラス担当者ごとに異なっている場合があり、まちまちの対応となっている。学生にとって、このような状況は不公平感をもたらす結果を招き、学生の学習に対する正当な評価体制とはなっていないという点で問題がある。

長所と問題点

成績評価においては担当教員の裁量にその多くを委ねているのが現状であるが、成績評価基準を教員間の合意とする際には次の点が問題となる。シラバスなどで宣言した履修項目について、知識・技能が最低到達レベルに達しているかだけで合否評価をする（絶対評価）のか、あるいは出席を加味したり不合格者の上限を設定した上で合否評価を行う（相対評価）のか。

将来の改善・改革に向けた方策

必ずしも成績評価基準が統一されていない現状については既に問題視しており、成績評価基準を教員間で合意したうえで平成17年度のカリキュラム改正作業を進めている。成績評価基準に合わせて、教育効果の測定についてもその方法や基準について議論を経た上で測定基準を学生に公開するなどして、カリキュラム運用の透明性を高めて一層効果的な教育を目指している。

(3) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

現状の説明

平成9年度から導入したシラバスには成績評価の方法の記載欄があるが、仮に成績評価の方法が明確になっていたとしても成績評価基準が明確になっているわけではなく、科目ごとに成績評価基準が異なってもいる。また、評価基準が各科目で定義されていたとしても、それが厳格に運用されているとは限らないのが現状である。

点検・評価

教員間での成績評価基準に関する合意形成とその厳格な運用は今後の課題となっている。とくに、同一科目でクラス分けをしている場合であっても成績評価基準が統一されていない場合もあり、早急に厳格な成績評価基準の策定を行う必要がある。

将来の改善・改革に向けた方策

現在、一部の学科で J A B E E 導入に関する議論が行われている。一定水準の教育レベルを保証するための J A B E E 的な教育評価とその成績評価基準をもって、本学の場合に適用することは幾つかの問題点が指摘されている。主な問題は、J A B E E が技術士という測定が比較的容易な技能教育の質的保証を目的としている点である。本学の場合、情報教育を教育の基盤としているが、本学の情報教育が想定している範囲は、一般的な情報処理教育のそれを遙かに超えており、J A B E E 的な評価・測定方法は、必ずしも妥当な方法であるとは限らない。しかしながら、教育の質の維持・保証という観点に立ったとき、J A B E E 的な教育方法の取り扱いが参考になる点が少なくない。

平成 17 年度のカリキュラム改正までに実施することを視野に入れながら、教育の質の向上とその維持を達成するという観点から、厳格な成績評価のための具体的な方策については、早急に教員間の合意形成をはかる予定である。

(4) 各年次及び卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性

現状の説明

進級時や卒業時に学生の質を検証する仕組みや制度はない。

点検・評価

しかしながら、学生の質を間接的にではあるが傍証する方策の 1 つとして、取得単位数を指標とした進級要件制度を実施している。取得単位数という表層的な数値だけを使って学生の質を補足する現在の方法には限界があることは十分認識しており、教育上の効果測定における課題と同様な問題が学生の質を検証・確保する場合にも浮かび上がってくる。

選択科目数が非常に多い現状も、学生の質を同定することを困難にしている一因となっている。学生の質を評価する基準は、学生が選択する履修科目が幅広くなればなるほど評価基準は曖昧となり、取得単位数といった表層的な基準で評価せざるを得ない状況を招き寄せている。

将来の改善・改革に向けた方策

学生の質を検証するためには、選択科目群が多い現在のカリキュラムを改正して、基礎教育および専門教育においてもコア科目を主たる履修科目として必修化し、選択科目を大幅に削減したカリキュラムの枝葉を刈り取りスリム化することが必要である。現在、平成 17 年度実施のためのカリキュラム改正作業を行っており、進級

要件を単純化するなど学生の質を検証するという問題意識で見直し作業を進めている。

(5) 学生の学習意欲を刺激する仕組みの導入状況

現状の説明

卒業式で、学科ごとに成績優秀賞、卒業研究論文や制作物に対する学長賞などの授与を行っているにとどまり、授業方法の改善のための意見交換や学生への明快な学習指針の提示など、具体的な形で学生の学習意欲の刺激は行っていない。

点検・評価

学生の学習意欲を刺激するために、正課授業とは別の正課外学習のために会計、コンピュータ、英語のための「スコーラ」という学習環境を用意してきた。しかしながら、教育効果の測定という視点が欠落したまま現在に至っており、資格試験などにどのような貢献があったかについての正確なデータが出ていない。また、スコーラに参加している学生数の捕捉についても曖昧であり、実際には少数の学生参加というのが実態である。したがって、スコーラという学習環境が学生の学習意欲を刺激する仕組みとしてうまく機能しているとはいえず、学生の学習意欲を刺激するための装置を正課のカリキュラムに埋め込む方策を議論する必要がある。

3 履修指導

(1) 学生に対する履修指導の適切性

現状の説明

学年・学期始めに各学年ごとに教務ガイダンスを行っている。また1年生、2年生に対しては、基礎ゼミⅠおよびⅡで個別指導を行っている。また3年生、4年生に対しては、卒業論文ゼミナールで個別指導を行っている。

点検・評価

履修指導については、各学年で学生の個別指導ができる体制にある。こうした指導においては履修指導だけでなく、生活指導や就職指導も併せておこなうことは原理的に可能であるが、こうした諸制度が有効に機能しているかの検証はなされていない。

長所と問題点

形式的にこれらの学生個別指導体制が整っているにもかかわらず、学生指導として実のある内容を提供しているかどうかについては不明瞭である。履修指導の適切性を測定するための基準や仕組みが曖昧であり、統一もされていない。その結果、担当教員ごとに履修指導が大きく異なっており、学生全体に対する公平性に欠けてしまうことになっている。こうした問題は、各学科においてどのような到達点に向